

# インドネシアの皮革産業



三菱UFJ リサーチ&コンサルティング  
持続可能社会部  
副主任研究員 橋本 和子

インドネシアは、皮革製品の産地として知られています。今回は、インドネシアの皮革産業について触れながら、皮革産業に従事する人物にスポットをあてて紹介したいと思います。

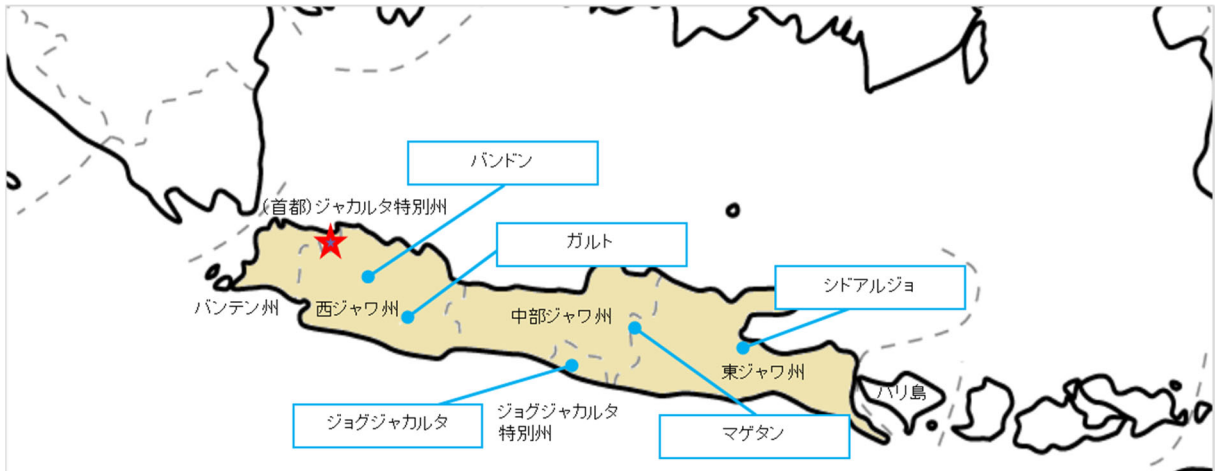
## ジャワ島に集中するレザーの産地

筆者は、業務で頻繁にインドネシア（ジャワ島）を訪問してきました。コロナ禍に入ってからオンライン対応となり、渡航の機会はすっかりなくなりましたが、そのような中でも皮革産業に従事する方々と出会う機会を得たので、そのことについて紹介してみたいと思います。

インドネシアは、なめし革、皮革製品の生産地として知られています。インドネシアの皮革産業は、バンドン、ガルト、ジョグジャカルタ、マゲタン、シダルジョが主な産地ですが、全てジャワ島に位置しています。この中で特筆すべきは、西ジャワ州に位置するガルト地域とバンドン地域です。

ガルト地域は、インドネシアで最も知られた皮革製品の産地です。インドネシア人通訳に「皮革の産地」について聞くと、開口一番「それなら、ガルト地域だよ。インドネシアで一番の皮革の産地だ」と答えてくれたのでした。ガルト地域にスカレガン地区（Sukaregang）と呼ばれる地区があり、ガルト地域における皮革生産地域の中心地となっています。なお、スカレガン地区での皮革産業の始まりは、1970年代頃まで遡ります。この地域の革職人の大多数は、羊、牛、水牛などの皮革を加工しています<sup>1</sup>。海外大手アパレル向けに輸出する企業も、この地域に立地しているようです。

<sup>1</sup> The Ministry of Trade of The Republic of Indonesia (2018) Export New Indonesia



(出所：白地図専門店)

(注：主要産地については、The Ministry of Trade of The Republic of Indonesia (2018) Export New Indonesia、業界団体へのヒアリングに基づき筆者作成)

一方で、西ジャワ州の州都のバンドンは、国内における文化の中心地としての歴史を有し、バンドン市は若者に好まれるファッションの発信地となっています。また、バンドン市及びその周辺地域には、皮革業・繊維・アパレルなどのファッション関連の工場やショップが集積しています。

## インドネシア産レザーの種類

インドネシアは、世界でも有数の皮革生産国です。

インドネシアでは、羊や山羊などのなめし革・レザー製品の生産・加工が行われていますが、イスラム圏であることから豚革の取り扱いほとんどありません。一方で、一部の文献に、豚革の生産も行われているという記述もあり、「イスラム教徒がほとんどのインドネシアでは、豚肉・豚製品を食べる・触れるのはご法度のはず。一体本当に存在するのか？」と疑問に感じたことがあります。皮革関連の業界団体に確認すると、豚革の生産・加工施設は存在するが輸出用施設であり、国内に流通することを前提とはしていないようです。推測ですが、そのような施設はおそらく非ムスリムの多い地域に立地し、ほとんどの従業員は非ムスリムなのでしょう。

また、皮革の種類についても、なめし革を国内生産し国内加工するケース、なめし革を国内生産して海外へ輸出するケース、なめし革を海外から輸入しインドネシア国内で皮革製品を加工するケースなど、方法はさまざまです。

インドネシアは、なめし革の製造が盛んな地域ではありますが、牛肉の消費量は少なく、従って、それらの副生物である牛皮の供給量も少ないようです。牛のなめし革は、海外からの輸入に頼っています。インドネシアにおいて、豚肉と違い牛肉は禁忌ではないのですが、筆者もインドネシアで牛肉を食べた記憶がほとんどありません。皮革は牛の副生物なので、牛そのものの消費があるところで発達することになります。この点について通訳や皮革業者に聞いてみると、「昔は牛はぜいたく品で、日常的に食べる習慣がなかった。牛が嫌いというのではなくて、イスラム教の祝祭日に特別に食べるものという考えがあり、今でもそういう扱いとなっている」とのことでした。

## 皮革産業に参入する若者

皮革関連の業界団体の人と話しているときに、「皮革産業は伝統的なファミリービジネスであるけれども、最近は若い人が参入するケースが散見される。彼らは地元の皮革製品を作って、若い感性を生かした製品を製造している」と教えてくれました。そしてひょんなことから、現地側のビジネスパートナーを通じて、皮革製品の小規模な工場を営むU氏について知る機会を得ました。U氏は27歳の若手のクリエイターです。

U氏は、インドネシアの西ジャワ州のガルト地域で皮革製品を製造しています。皮革産業に従事するきっかけとなったのは、今から5年ほど前の学生時代に覚えたレザークラフトの知識を活用して、小遣い稼ぎにオンラインマーケットで皮革のライターケースを売ってみようと考えたことに遡ります。日本では最近になって副業解禁などと言われていますが、インドネシアでは今も昔も副業に熱心な人が多く、本業のほかに通販などを行っている人をよく見かけます。

彼もそのような1人であるわけですが、それまでただの学生だった彼に大量の発注が舞い込むところから、現在の仕事が始まります。ウェブサイトには皮革のライターケースの広告を出したところ、いきなりインドネシアの大手たばこ会社から、アメニティ用のライターケースの注文が大量に入ったのです。もともと副業を始めた時点で、大手企業からビジネスを持ちかけられるだけの、レザー製品のデザインセンス、加工技術も一定の水準に達していたのでしょう。しかし、「経営に携わる人、新規ビジネスを始める人には、実力のほか運や縁も大切」と巷で言われるとおり、彼もいきなり大手企業との取引をかなえ、実績を作っています。手袋やライターケース、キーホルダーなど、たばこ会社からの依頼は小さなアイテムですが数量が非常に多く、1回につき最低5,000個ほどの発注があるようです。

たばこ会社からの発注をきっかけに、U氏は本格的に皮革産業に参入し、今日に至るまで皮革製品の生産を続けているとのこと。牛革をメインとして、時々蛇革などを使うこともあるといいます。普段は常勤の技術者を3人雇用し、繁忙期にはフリーランスの職人と15人ほど契約を結んで、ライターケース、手袋、キーホルダーなど、日々さまざまな製品の生産を行っているようです。



(左) ボトルホルダー (中) 名刺入れ (右) ケーブルのケース

(写真提供：U氏)

U氏のプロダクトは、インドネシアの伝統的な皮革製品のテイストに縛られない、若い感性が生かされた作品となっています。最近では、財布や鞆のほか、ペット用品関連の注文もあり、犬の首輪も作っているとのこと。インドネシア人は大半がムスリムであり、宗教的な理由から犬を忌避する人が多いのが現状です。おそらく犬を飼育するのは、インドネシアの華僑や外国人など中流層以上の人ではないかと思われます。犬の首輪の製造と聞いて、上手なビジネスをしているな、と感じました。中流層

以上の人にとって動物は単なるペットではなく家族の扱いとなり、動物好きの人は国を問わず、お金を惜しまない傾向があります。インドネシアの経済発展に伴い、このような傾向は多分今後も見られるでしょう。

U氏の使用しているレザーは、主に地元産の皮革を調達、一部はブラジルなどの外国産を使用しています。また、なめし革に化学薬品を用いない、アカシアの樹皮から抽出された樹液のタンニンを用いたベジタブル・タンニン・レザーを使用しています。ベジタブル・タンニン・レザーは、通常的なめし革よりも5倍以上価格が高いそうです。

## インドネシアの皮革産業関係者に聞く日本製品のイメージ

彼に、日本の皮革製品について聞いてみると、「日本の革製品の品質は安定していて良いということを知っているが、デザインには斬新さ、革新性、創造性が乏しいような気がする」と述べており、インドネシアでは日本の皮革製品の魅力は十分に伝わっていないようです。このあたりは、U氏に限らず、他の事業者からも、「日本製は、皮革ブランドの価格が品質に見合わない」「(日本製の革靴の)デザインは単調でモノトーンのものが多い」といった指摘を受けました。日本製ということで、品質が良いイメージは漠然と持ってもらえているけれども、ブランディングの面で成功しているところは非常に限られているのが実情であるようです（なお、ブランディングに成功している国はイタリア、フランスです。イタリアの場合、インドネシアで開催される見本市などを通じて、イタリア政府がインドネシアを支援しています）。

しかしその一方でU氏は、工具、ハンマー、ナイフなど皮革製品の製造に用いる道具については、ネット通販を利用して日本製のものを中心に調達しているとのこと。SNSなどを駆使して、良い道具について情報収集し、輸入品を取り扱っているネット通販などから購入しているそうです。特に日本製にこだわりがあったというよりは、「いろいろ情報収集をして行きついた道具が日本製だった」ということのようにです。

インドネシアの人々は、PCが普及する前にスマホを手にしたという人が多く、日常のさまざまなやりとりをSNSで行っています。かつて筆者が搭乗する飛行機の大幅な遅延に見舞われたとき、インドネシア人の同行者は、航空会社のカスタマーサービスとSNSでやりとりをしていました。

インドネシアの海外展開を行いたい企業は、ウェブサイトだけではなく、SNSによる発信についても検討したほうがよいでしょう。



皮革製品を製造する道具の多くは日本製  
(写真提供：Syahrul Khoir氏)

### <執筆者略歴>

- 1996年 京都女子大学東洋史学部卒業
- 1997年 アンカラ大学トルコ語上級ディプロマ取得
- 2001年 ロンドン大学大学院東洋アフリカ学院地域研究学部中東研究科修了
- 2003年 一般財団法人日本経済研究所 入社
- 2009年 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社入社、現在に至る。